

本の中のサツマイモ（8）

＜喜田川守貞著・宇佐美英機校訂『近世風俗志（守貞謾稿）』

（岩波文庫・1996）＞

元 川越サツマイモ資料館長 いのうえ 井上 ひろし 浩

* 著者のこと

喜田川守貞は江戸時代後期の1810（文化7）年、大坂で生まれ育った。本姓は石原だったが1840（天保11）年、江戸の北川家の養子になった。それからはずっと江戸で暮らした。

守貞は早くからわが国の風俗習慣に興味を持ち、江戸に移る3年前からすでにその本格的な調査を始めていた。

守貞の本職はわかっていないが『守貞謾稿』の校訂者、宇佐美英機氏は砂糖関係の商人だったのではなかろうかとされている。

江戸に移った守貞は^{かみがた}上方と江戸との風俗習慣に大きな違いがあることに驚きながら、その徹底的な調査と記録に没頭した。その仕事がほぼ終わった1853年の夏、大事件が起った。ペリーの率いる東インド艦隊が浦賀に来航し、日本の開港を迫るアメリカ大統領の親書を幕府に提出し、返事を来年もらいにくると通告した。

それで江戸は大騒ぎになった。江戸の人々は、江戸が戦場になることを恐れた。大切な家財の疎開を急いだ。むろん、守貞も同じだった。『守貞謾稿』の序文にこうある。「近時に夷船再航の状ありて衆心石上に座するが如く、之に依り遂に訂正せず

諸財と共にまとめて今日、川越の親族に託す。嘉永六年癸丑冬。喜田川舍山」

その翌年、ペリーの艦隊が本当に再来した。だが、幸い戦争は起こらなかった。幕府が日米和親条約を結んだからだだった。おかげで川越に疎開した『謾稿』の原稿も無事、江戸の守貞の手元に戻った。守貞もほっとしたに違いない。川越から取り戻した膨大な量の原稿の校正と、その後に知ったさまざまなことの追加作業に励んだ。その中にサツマイモのことも「焼きいも事情」として扱ってくれている。

* 蒸しいもの売り歩き

京都や大坂にはあっても江戸になかったのは、サツマイモいもを蒸して箱に入れ「ほっこり、ほっこり」と言いながら町の中を売り歩く「蒸しいも屋」だった。そのことがこうある。

「京坂にては蒸して売る店はわずかに四、五戸あり。また荷ひて巡り売るあり。荷ふ所、甘酒の箱に似て無行燈なり。売り詞に「ほっこり、ほっこり」と云ふ。意は温^うの^{ことば}貌^{かたち}なり。ちなみに云ふ、江戸にて蒸し芋ありといへども、焼き甘薯を専とす。これ^をを^をる^を店^を数^を、挙^をげて^を数^をふ^をべ^をから^をず。また^{せんぱく}阡陌^{ひく}番小屋にてこれを売る。価京坂より賤し。

市街番小屋、ぞくに番太郎と云ふ。武家の辻番には買する者これなし」「また云ふ、京坂の甘薯の大略一貫目値六、七十銭。また京坂にも焼芋店あり。多くは路傍に小店を携へ出てこれを売る。あるひは小戸にて売る。ともに行燈あり。○やき。全薯焼の謎なり。また「八里半」と誌すあり。栗の美味に近きの謎なり。栗と九里と和訓近き故なり。江戸も専ぱらこの二書を用ふ。甘薯は三都とも冬を専ぱらとす」(巻之六・生業下、289頁)。

文中の「阡陌」とは、都会の中の「四辻」のことである。

* 江戸の焼きいも屋の始祖

江戸では治安維持のための自身番所と大木戸がどの町にもあり、その木戸の脇には木戸の番人が住む番小屋があった。「番小屋。これを衛夫を番人、あるひは、ばんたと云ふ。俗には番太郎と云ふ。多く北国産の人多し。お成りあること、その他府命あること、あるひは水道普請水切れのこと、御免勸化来るべきこと等は、鉄棒を引きて町中にこれを報せ、夜は拍子木を打ちて六時を報じ、その他すべて町内の雑務を職とす。

この番屋、広さ九尺に一間を定制とすといへども、庇に矯て九尺二寸ばかりなること自身番と同じ。けだし番人は私宅別にこれなく、皆妻子とも番小屋に住みて、飯もここに炊きて食すなり。

また番小屋にて草履・草鞋・箒の類ひ、鼻紙・蠟燭・瓦・火鉢の類を売る。これにより草履・草鞋は店にて売る者、はなはだ

稀なり。

また冬は焼きいも、薩摩芋を丸焼きにし、夏には金魚等をも売る。また常に籠菓子一つ価四文なる物を売る。故に江戸の俗、籠菓子を号して番太郎菓子と云ふ。京坂に云ふ駄菓子なり」(巻之六・生業下、288頁)。

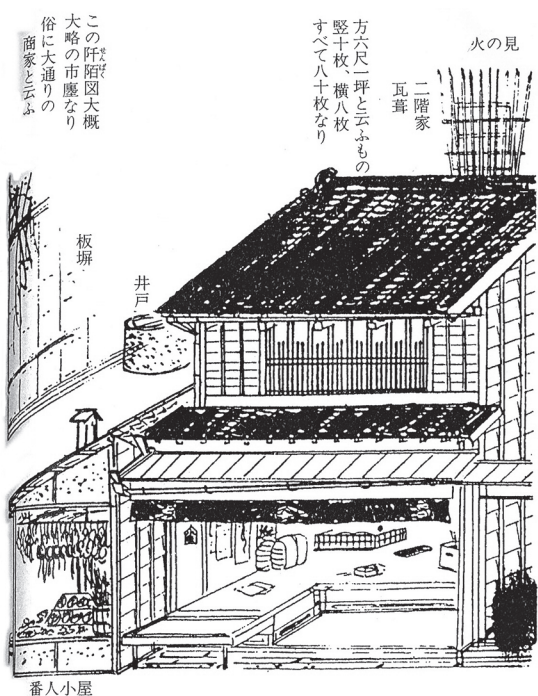
番太郎の仕事に対する給金は町内から出ていたが小額だった。それで木戸番小屋で日用のさまざまな物を売ることが許されていた。だからそこは町内の人々が集まりやすいところで、今日のコンビニのような感じのところでもあった。江戸の焼きいも屋はその番太郎の一人が、自分の店の商品の幅を広げようとして始めてみたものだった。

それが当たって、いきなり繁盛した。それを知った江戸中の番太郎が一斉にそれを見習い、サツマイモを焼いて売ることになった。それも大当たりになったから、江戸の冬は焼き芋のいい香りが漂うところになった。その看板の行燈の文字は上方に倣った「八里半」だった。だがやがて上方に「十三里」が現れると、江戸の焼きいも屋の看板もそれに倣うものが多くなった。

『守貞謾稿』にこうある。「因みに云ふ、京坂にて行燈に十三里と書けるありし。栗より味きの謎なり。九里より四里、和訓近し」(巻之五・生業、236頁)。

* 江戸の木戸番小屋図

守貞は江戸の木戸番小屋の様子がよくわかる「今世江戸市井の図」(巻之三・家宅、92～93頁)を書いてくれている。次図がそれである。



今世江戸市井の図